

[翻訳会社に聞きました]

## 実務翻訳とはどんな翻訳？

英文読解より、内容の理解が最優先事項

株式会社ジェスココーポレーション 代表取締役 丸山 均氏

### 調べものをして、内容を十分理解してから訳す

実務翻訳では、よくクライアントから「多少表現がゴツゴツしていてもいいから、原文に忠実に訳してください」と言われます。しかしそれは、“直訳”でもなければ、“逐語訳”でもありません。“美しい日本語でなくてもいい、多少ゴツゴツした日本語でもいい。ただ、書かれている情報を忠実に訳し、正確に盛り込んでいかなければならない”ということなのです。ですから実務翻訳で一番重要なことは、そこで表現されている内容を理解しなければならない、ということになります。

実力のある実務系の翻訳者さんは皆さんおっしゃいます。「内容をわからずに訳すなんてとんでもない。必ず内容を理解してからでないと翻訳はできない、それは当然のことだ」と。私もずっと、翻訳とはそういうものだと思ってきましたが、数年前に、分野によってはこれが当てはまらないものもあるということを知り、驚きました。

翻訳者が集まる席で、「(実務翻訳は)内容をわからずには訳せない」という話をしたときのこと、ミステリ翻訳をしている文芸翻訳者の方が「私は今までまだ一度も人を殺したことはないから、主人公の気持ちはわからずに訳している」と言いました。また他の文芸翻訳者の方は「以前、一度も行ったことのない街について翻訳をした。あるとき、その街の映像をテレビで偶然見かけたら、自分が翻訳したことが見当違いだとわかった」と。さらに、実務翻訳の一分野である特許翻訳の方が「特許は世界の最先端の研究者がやっていること。その内容なんて、私ごときにわかるわけがない」とおっしゃいました。

そうか、同じ翻訳とはいえ、いろいろな考え方があるのだな、と思いました。特許などは特別として、実務翻訳が、内容を理解していないとできない、というのはやはり疑いようのない事実ですが、翻訳によっては全然違うものもあるのです。

逆にいえば、実務翻訳が扱うテーマは、現在われわれ人間が活用している技術や商品、サービスであり、きちんと調べれば理解できることなのです。この場合の理解とは、英文を理解するのはもちろん、そこで述べられている技術的なことなど、背景をきちんと理解するということです。

## 不得意分野を補う勉強を怠らない

実務翻訳は「多少語学力が劣っても、技術内容に詳しい理系出身者」が有利か、それとも「高い語学力を持つ文系出身者」の方が有利かというのは、昔から議論がなされてきたテーマです。あるネイティブはこう話していました。「理系出身者のほうがリライトをしやすい。なぜなら、内容を理解しているので、誤訳が少なく、英語のブラッシュアップのみに専念できるから」と。ところが、別のネイティブは「文系出身者のほうがよい。なぜなら、翻訳に必要な技術知識は比較的短期間に身につけることができるが、語学センスというのは一朝一夕には身につかない。センスのない人の文章は進歩がなく、いつまでたっても同じリライトを繰り返さねばならない」と言うのです。

どちらも一理あると思いますが、現実的には6：4の割合で文系出身者のほうが数は多いでしょうか。いずれにせよ優秀な実務翻訳者は、抜群の語学力に加え、論理的思考に優れていると思います。また、人それぞれ得意不得意があるので、不得意分野を補うよう、常に勉強を怠らないことが重要です。

## 日英と英日と両方できるのが理想的

弊社では日英翻訳と英日翻訳を同じくらいの割合で受注しています。この割合は世界経済の動向によって変化しますが、翻訳者個人にとっても、両方の翻訳をすることは非常に重要だと考えます。現在のように輸出が減ると日英翻訳の需要は落ち、英日翻訳の依頼が増えてきます。どちらもできることで、受注の波を受けずに、リスクを回避することができるわけです。

そして私の考えでは、日英翻訳から始めて、それがしっかりできるようになってから英日翻訳にも手を広げていく、というのが理想だと思います。英日のほうが敷居は低いですが、それだけにライバルも多く、実際に仕事を始めると激しい競争に巻き込まれます。日英翻訳は最初は苦勞するでしょうが、そこを乗り越えると、長期的に安定して仕事を受注できるようになります。